

要 旨

日中両言語における数字を含む同形副詞の対照研究

——副詞と動詞とのコロケーションを中心に——

万 礼

本論文では、副詞と動詞とのコロケーションを中心に、日本語と中国語における数字を含む同形副詞の共通点と相違点について考察する。たとえば、「一一」と「一一」のような副詞であり、この場合、日本語の「一一」を対象としてとりあげる（日本語の副詞は「」によって、中国語の副詞は“ ”によって表示する）。日中両国のデータベースを活用し、可能な限りの用例を収集し、言語事実を記述して、両言語の異同を明らかにすることを目的とする。

本論文は序論と結論を除いて、三部からなる。

序論では、本論文の研究目的を述べ、研究対象を明確にする。それに、日中両言語の副詞の分類および中日同形語の定義を述べ、とくに数字「一」／“一”の意味、語構成などに関する認識の異同をまとめる。

第一部では、日中両言語におけるコロケーションに関する先行研究を踏まえて、数字「一」／“一”を含む副詞と動詞とのコロケーションについて、おもに「連続的な量」と「非連続的な量」と2分類し、「量規定的なむすびつき」の特徴が得られた。

第二部では、まず、日本語『大辞林（第三版）』と中国語《现代汉语词典（第六版）》に基づいて、数字「一」／“一”の含む二字副詞を取り上げ、さらに、その中において、使用頻度が比較的高い同形副詞を抽出し、動詞とのコロケーションを考察する。具体的にあげると、「一一」／“一一”、「一度」／“一度”、「一旦」／“一旦”、「一挙」／“一挙”、「一斉」／“一斉”、「一向」／“一向”、「一概」／“一概”、「一時」／“一時”という日中両言語において同じ漢字表記である副詞を対象にしている。それぞれの意味的、形態的な側面、とくに動詞とのくみあわせ、述語形式を着目しながら、異同を検証する。調査の結果、①日中の「一挙」／“一挙”と「一斉」／“一斉”は動詞と方法規

定的なむすびつきをつくり、両言語における差異が比較的小さいこと、②日本語の「一概に」は言語表現をさししめす動詞と共起することが多く、中国語の“一概”と同じく「すべて、全部」という空間的な量規定的なむすびつきをつくることが明らかになった。③「一向」／“一向”、「一旦」／“一旦”、「一時」／“一时”、「一度」／“一度”はともに中国語古代においては時間の意味を持っていたが、言語の発展とともに、中国語の“一向”はそのまま、継続動詞とむすびつき、時間的な量という量規定的なむすびつきをつくるようになった。そして、日本語の「一向」は「時間的な量」から「程度」という量規定的なむすびつきとなった。また、日本語の「一旦」は「時間的な量」という量規定的なむすびつきによって多少使用されているが、中国語の“一旦”は「時間的な量」というむすびつきが徐々になくなり、文全体にかかる陳述的な意味を帯びてきた。「一時」／“一时”は現代日中両言語においてともに時間的な量というむすびつきで使用されている。「一度」／“一度”はともに動作・行為の頻度を表す意味を持っていたが、日本語のほうは陳述的な意味という独自の役割を果たすようになった。和語「ひとたび」のほうは「一度」／“一度”に比べて、陳述的な意味がより高い。④日本語の「一一」は精神的活動をさししめす動詞と共起することが多く、動作をおこなうときの行為者の心構え、物事のとりあつかいかたの側面から特徴付けが行われ、「行為に対する態度」という質規定的なむすびつきとなった。一方、日本語の「一つ一つ」は中国語の“一一”と近い使い方が多く、「人の動作の特徴づけ」という質規定的なむすびつきとなった。また、日本語「一一」は文頭に用いられることが多いことから、「一つ一つ」・“一一”に比べて陳述的な意味が高いと言える。

第三部では、日中両言語における「再」／“再”を含む漢語副詞について、「再」／“再”、「再度」／“再度”、「再三」／“再三”および「一再」／“一再”、「再再」／“再再”、「再三再四」／“再三再四”を比較した。その結果、動詞とのくみあわせからみれば、いずれも「頻度」という「時間的な量」という量規定的なむすびつきとなっていることが明らかになった。漢語構成からみれば、「再度」は「再」と「渡る」の動作をあらわす「度」と組み合わせあって、偏正複合語となっていて、動作行為の発生回数を限定的に修飾している。それに対して、ほかの「再三」「一再」「再再」「再三再四」は数詞「二」の意味を表す「再」が数詞「一」、「三」などと組み合わせあって、並列連合複合語となって、うしろの動作行為の発生回数を限定するというより、それを強調するニュアンスが感じられる。中国語の“一度”は動作行為の発生時間量を表す機能が

残っているが、特に存在、作用などを表す動詞との共起が可能である。しかし、“再度”の場合は、“度”の時間量をあらわす役割がなくなり、動作行為の発生回数しか表せなくなった。日本語では、「一度」と「再度」の主な役割は動作行為の回数を表すことであるが、“度”の時間量を表す役割はほとんど見いだせない。「一度」の場合は陳述的な意味を帯びるようになったが、「再度」の場合は具体的な動作のアクチュアルな回数を表す。その違いの根拠は数詞「一」、「二」（再）と何か関係があるかどうか、本論文では保留されている。

「結論と今後の課題」では、各章のまとめを総括した上で、日中両言語の同形副詞を考察するために、動詞とのコロケーションからみる重要性についてふれる。今後は、中日同形副詞の範囲を広げ、副詞と動詞とのコロケーションの差異およびその原因について深く調査を進めていきたい。